

最優秀賞

『家族からの あったかい退職プレゼント』

京都府 矢野 和子^{やの かずこ}さん 61歳

37年間の教職生活が終わった。校長として気を張り詰めた6年間も無事終了。家族の支えがあつてこそ、最後まで全うできた。辞令交付帰りの電車の中で、家族へLINEを送ったら、次々と返信が届いた。

先程、退職辞令をもらいました。今日まで働かせてもらってありがとうー。色々協力してくれて感謝感謝です。子ども達にも迷惑かけたなーと思うけど、楽しんで仕事させてもらいました。しんどかったけど、何とか最後まで勤める事ができました。みんなに感謝です。ありがとうー。

夫

37年間お疲れ様。残り11時間何も無いことを祈っております。これからは、一緒に旅行や映画に行ったり、畑仕事をしたりしようね。

娘

長い間お疲れ様でした。無事退職おめでとう。仕事を楽しめるのが、本当に素敵だと社会人になって思いました。これまで頑張ったので、これからはゆっくりしてください。

息子

長いことお勤めお疲れ様でした。子ども達がこれまで好き勝手できたのも、お母さんが《頼もしく働くおかあちゃん》だったからこそだと思います。ありがとう。そしてこれからもよろしくお祈いしますm(^_^)m

何物にも替えられない心温まる家族からの退職プレゼント。さあ、これから、どんな恩返しをしようかな…?

審査員のコメント

●吉田委員

校長先生まで勤め上げた矢野さん。母として、仕事人として、本当によく頑張ってきたんですね。ご家族同士のやり取りに、ご家族からの応援を受け、支え合いながら働いてこられた日々を思い、同じ働く母親として強く感銘を受けました。

●坂元委員

チャットシステムにおけるやり取りを扱っており、これまでは見られなかった形式と内容を備えた作品でした。独創的であるとともに、今日ではむしろ現実的な在り方であり、あるべきものであったと言えます。家族のやり取り内容も心温まるものでした。

優秀賞

「まもへ」

大阪府 今出 望^{いまだ のぞみ}さん 37歳

日本を発つ日が近づいてきました。

あなたと知り合ってもうすぐ10年。

結婚式で「毎日皿洗いをします」と誓ってくれた言葉は、本物でした。

双子が産まれてからは、仕事から帰ってくると、毎日布おむつを数十枚洗ってくれました。

海外出張に無理やり同行した時は、スーツで双子を抱いて仕事をしていましたね。

もう一人家族が増え、三人ベビーカー、三人布おむつの時代も乗り越えました。

私が仕事に戻ると、毎日保育園の送り迎えをし、順番に体調を崩す子どもに付き添い、一週間仕事を休

むことも何度もありました。

私が休日仕事に出ると、一日子どもと楽しく過ごし、仕事から帰ると、子どもは幸せそうに寝ていて、私のごはんを作って待っててくれました。

あなたは、最愛の夫で、最高のお父さんです。

次は私の番。

これから夢に向かうあなたを支え、全力で子どもを守ります。

何があっても大丈夫。

今のまま、毎日全力で生きていこう。

夫婦あつての家族、これからもよろしくね。

審査員のコメント

●伊久美委員

なんて素敵なお手紙なんでしょう！夫への感謝の気持ちを綴りながら、「次は私の番」、「何があっても大丈夫」、などのインパクトある短い言葉がアクセントになって、大変完成度の高い文章です。まもさん、これからもきっと、何があっても大丈夫ですよ！

●吉田委員

有言実行で育児をしてきたお父さん。それを認め、感謝している妻の視点から、未来に向けた可能性を感じ、気持ちが明るくなりました。



優秀賞

「我が町の観音様へ」

福岡県 なかむら ゆうこ 中村 裕子さん 54歳

あなたの日課は朝夕のウォーキング。ある朝私は、あなたが小学1年生の寛太君に手を振る姿に出会いました。寛太君はお母さんと二人暮らし。お母さんが夜勤で留守の日は、ウォーキング途中のあなたが、玄関先で「行ってらっしゃい」を言うのですね。その日も寛太くんはあなたに見送られ、元気に駆け出して行きました。それから私は、夕方のあなたも見かけました。3年生の朝子ちゃんと、アパートの階段で割り算競争している姿です。そしてお母

さんが帰宅する頃合を見計らうように、「じゃあ、また明日」とさりげなくその場を去って行きましたね。

どんなに悪天候であろうと、あなたが一日も欠かさず歩き続ける意味がようやくわかりました。表向きは「健康のため」。でも、本当の理由は、地域の子供たちに寂しい思いをさせないため。そんな観音様のような「峰」さん、あなたのことを、地域の人々が「観音(みね)」さんと呼んでいること、ご存知でしたか。

審査員のコメント

●坂元委員

地域で子育てを支えている一人の女性について描いています。この女性のさりげなく優しい行動には心洗われました。また、語りかけのような文体が用いられており、これも作品を味わい深いものにしてます。

●渡邊委員

地域の子どもたちのところに次々現れては少しの時間をともにして去っていく、某テーマパークのマスコットのようにも感じました。見守っているのは子どもだけではなく、地域そのものなのかもしれませんね。



優秀賞

「父母の職場で育った私たち」

岐阜県 ほそえ りゅういち 細江 隆一さん 49歳

父の通夜と葬儀にはたくさんの人たちが足を運んで下さった。私は喪主として母と妹とともに葬儀会場の玄関に立ち、訪れる人たちを出迎えた。

「まあまあ、こんなに大きくなって」。

訪れる人の中には、そう言って私を上から下まで見下ろす方が何人かみえた。

いずれも父が勤務した病院関係者だった。父が臨床検査技師として勤務する病院に、私は子供のころよく遊びに出かけていた。だから、医者も、看護師も、患者も、私をよく知っていた。

私もまた、お会いする人たちを覚えていた。

「おはよう。今日も元気そうでいいね」と、声をかけてくれた医者。忙しいはずなのに、ゲームやおしゃべりに付き合ってくれた看護師。「ほらっ、お菓子をあげるよ」と、私にたくさんお菓子をくれた入院患者。父の通夜と葬儀という畏まった場なのだが、久しぶりにお会いする方々に、懐かしさを覚えたものだった。

思えば昭和の時代は、子ども達を職場で、地域で育てようという風潮があった。病院に出入りするなど現在では考えられないが、帰宅しても父母が共働きで(母も同じ病院の栄養士だった)、寂しさを隠しきれない私や妹は、父母の職場によく出入りをしたものだ。そこでたくさんの人たちに出会いながら、成長していった。

同じことは現代には求められないかもしれない。しかし、家族で、職場で、地域で子育てをしようという風潮は、時代が変わっても実現できるのではないだろうか。働く父母の姿を観ながら、私や妹は「二人ともすごいな」と感心したものだった。たくさん接してくれる大人からは、人との付き合い方を教えてもらった気がする。

子育ては、様々な人が関わるのが大事なのだと思う。その意味で、私や妹は本当に幸せだったといまも思う。

審査員のコメント

●伊久美委員

ご両親の働く姿を見ながら育つ!子供にとって、人生観が変わるほどかけがえのない時間を過ごせたことと思います。職場で、地域で、社会で。みんなで子供たちを育てる。理想ですよね。この作品を読んで、そんな社会にしたいと強く思いました。

●大豆生田委員

父の通夜と葬儀に際して、子ども時代に温かく接してくれた職場や患者などに再会し、たくさんの人から大事に育てられた自分達がいかに幸せで、かつての地域で子育ての大切さが説得力を持って伝わってくる作品です。



「たくさんの母たちへ」

宮城県 堀内 睦乃さん 43歳

この地域に越してきて、11年になります。越してきた年から5年後、この地は東日本大震災で揺れました。高台にあり、地盤も固く、大きな被害はありませんでしたが、電気、ガスが止まり、私は家の中で子供を抱え悶々と過ごしていました。

水は出ていると安心していましたが、数日たったある日、突然激しく玄関をたたく人がいました。

そして大声で「水が止まるから、早くためなさい。」と怒鳴ると、すぐに隣の玄関へ走り去りました。婦人部の奥さんでした。慌てて蛇口をひねってみると、水圧が弱り、ちょろちょろ水が流れ出てきました。おかげさまで、家にあるすべての容器に水をためることができたのです。

主人の友人が、県外から車で駆けつけて、たくさんの物資を届けてくれました。食品ラップが一箱ありましたので、ご近所に一軒一軒配りました。すると、給水車が何日に来るといふ貴重な

情報や、子供にあげると、アツアツのがんづきをいただいたりしました。配り終えて家に帰るころには、箱が、他のものでいっぱいになりました。

いっぱいになったのは、わたしの心でした。勝手に自分で築いた壁がこの日を境に取り払われたのです。あれから6年、近所で名前を知らない人はもういません。公園前のおばあちゃんには、娘の七五三の着物を縫ってもらいました。隣のおばあちゃんには旅行に行く度、留守にすることを伝えてくれます。角のおばあちゃんには毎週洋裁を教えてもらっています。子供に習字をしてくれるおばあちゃんもいます。ご近所中からお下がりが回ってくるので、子供たちの服は買ったことがありません。大変な震災でしたが、地域の方々と繋がることのできた貴重な経験になりました。たくさんの母達に支えられ今ここに住んでいます。ここにきて、本当に良かった。お母さんたち、ありがとうございます。

審査員のコメント

●坂元委員

地域における支え合いの素晴らしさをよくよく感じさせてくれる作品です。筆者は、東日本大震災をきっかけにその素晴らしさに気づきましたが、逆に言えば、これは、素晴らしさにはなかなか気づきにくいことを意味します。そのことも教えてくれる作品です。

●渡邊委員

震災で甚大な被害に遭われたにもかかわらず「ここにきて、本当に良かった」と思える地域の絆を育ててこられたことに感銘を受けました。地域で誰もが母親になっていく輪が作られたような、読後感がさわやかな作品でした。



「こどもは社会からのあずかりもの」

神奈川県 吉田 明美さん 61歳

ずっと赤ちゃんに恵まれず、わたしは仕事に没頭していた。

大きくなったら、おかあさんになりたい。

ずっと、そう思っていたのに、夢はなかなか、かなわなかった。

母がなくなって、父と同居を始めてすぐ、奇跡のように、命が宿った。

わたしはおかあさんになれた。

愛する人をおとうさんにしてあげられた。

そして、わたしの父をおじいちゃんにしてあげられた。

でも、仕事はやめなかった。

だって、こどもは社会からの預かりものだから。

いずれは社会に返すもの。

そう言ったのはおじいちゃんだね。

おじいちゃんが子育てを支えてくれた。

いつも、わたしを支えてくれた。

おかげで、あの子は本当にいい子だった。

おじいちゃんがお星さまになったとき、あの子が一番泣いたよ。

そして、二十歳になったあの子は、一人暮らしを始めた。

半分、社会におかえしできたよね。

わたしの家族は、わたしを通り過ぎながら、わたしを幸せにしてくれている。

審査員のコメント

●伊久美委員

「こどもは社会のあずかりもの」。ハッとさせられるタイトルでした。社会の中で子どもを育てるということを、日常的にしっかり考えていらっしゃる事がよくわかります。お子さん、二十歳になったのですね。社会にお返し、しっかりできていますよ！

●大豆生田委員

「こどもは社会からの預かりもの」とする見方がとてもすがすがしいです。自分から離れていったおじいちゃんも、娘も、自分を通り過ぎていくことで、私自身を幸せにするという見方について目頭が熱くなります。